



やっぱり歴史はおもしろい

——山室研究室～人文社会群——



山室 恭子 助教授

理工系の大学であるこの東工大においても、理工学以外の研究を行っている研究室が存在するということを皆さんはご存じだろうか。そのひとつに人文社会群の研究室がある。

ひとくちに人文社会群といってもその研究内容は様々であり、その先生が担当している講義を履修した人以外にはほとんどなじみがないことだろう。そこで今回は、歴史学、とくに日本中世史を専門としている山室先生の研究室を訪問し、お話をうかがった。



歴史を研究すること

山室先生が専門としている日本中世史とは、鎌倉時代から戦国時代までの歴史をさす。先生はこれまで、主に戦国大名についての研究をしてきている。

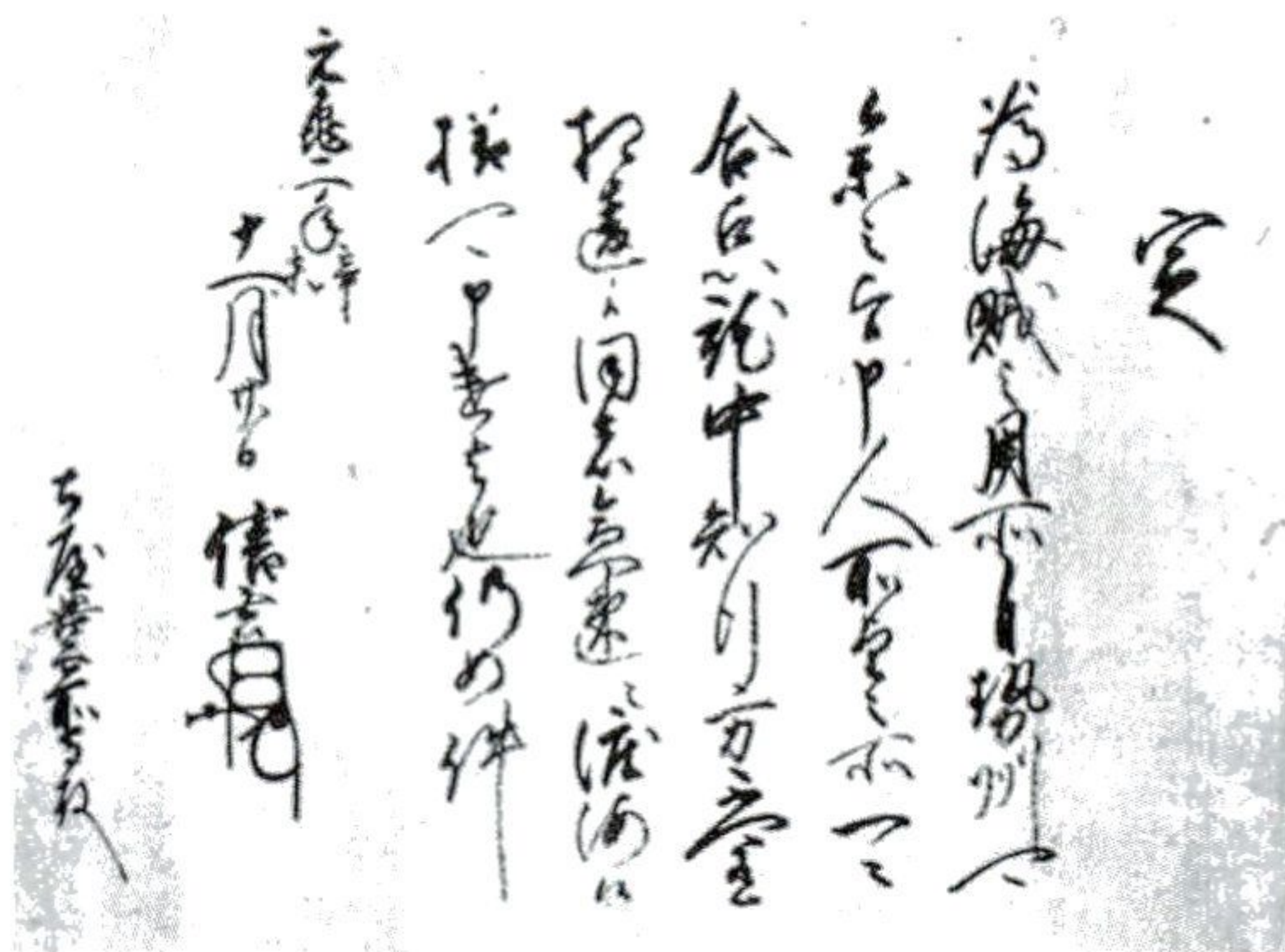
ところで、読者の皆さんの多くは、歴史学の研究といってもどのように進められるものなのか想像もつかないのではないだろうか。もちろん、人により、また場合により様々であるが、ここでは山室先生が一般にとっている方法を紹介しよう。

まず最初に研究テーマを設定する。そのきっかけとなるのは“疑問”である。よく知られている歴史上の出来事は、本当にその通りだったのだろうか。歴史上の人物が行ったことには、どんな意図があったのだろうか。こういった疑問を抱き、その謎を解こうとするところから研究がはじまっていく。

そういった謎に対する答えが出るのは史料を調べているときである。例えばある戦国大名に関することであれば、その戦国大名が出した手紙や掟（もんじょ）といった文書や当時の様子を記した日記などを探し出す。そしてそれらを読みとくことによって謎を解いていくのだ。

とはいえ、ただ漠然と史料を眺めても何も得られるものはない。ある疑問に対して、きつこうだったに違いないという、独断と偏見とでもいえるような仮説をたてる。そして仮説を裏付ける史料を探すといった形で研究を進める必要がある。もし史料を調べて最初の思い込みとは違うものが出てきたならば、仮説に修正を加えていく。これをくりかえして結論を出すのだ。

このように、先生の研究において、仮説を裏付



文書の一例（武田信玄により出されたもの）

ける証拠となるべき史料は必要不可欠なものである。だが、史料というものは過去の記録であり、当然これ以上増えるものではない。たいていの史料は、これまでの歴史学の研究の中で何らかの形で使われてきている。ほとんど調べ尽くされてしまったかのように思えるかもしれない。しかしこれまでとは違った観点から眺めることによって、今まで使われてきた史料からも新しいことがわか

るのだ。ここから、新しいことを発見するために必要なのは新しい観点であることがわかる。それは最初に疑問を感じる着眼点であり、また仮説をたてるときの発想である。それらをいかに斬新なものにできるかが先生の研究における鍵となる。そうすることによって、今まで信じられてきたことを覆すような歴史上の事実を発見することができるのだ。



伝説の裏に隠された意図

では、先生が行った具体的な研究の例を紹介しよう。そのひとつに「戦国時代の伝説のルーツを探る」ことがある。伝説というものはそれまでの歴史学の研究の中ではあまりとりあげられていなかったものであり、そこに注目するのは山室先生ならではのことだろう。その中から、ここでは「三本の矢」の伝説に関する研究を紹介する。

皆さんは「三本の矢」の伝説をご存じだろうか。そのあらましはこうである。

「毛利元就という戦国大名には、三人の息子がいた。元就が三人の息子に一本ずつ矢を渡して折らせたところ、矢は簡単に折れてしまった。今度は矢を三本まとめて折らせたら、矢は折れなかった。元就はこのようにして、三人の兄弟が一致団結することの大切さを説いた」

この伝説のルーツを調べてみたところ、これは江戸時代になってから突然有名になったものであることがわかった。実際にこの通りの出来事が戦国時代にあったわけではないらしいのだ。

これは誰かがでっちあげたに違いない。先生はそう考え、さらに詳しくルーツをたどってみた。すると、元就が三人の子に宛て、長男を中心に兄弟で協力していくようにという教訓状を出していたことがわかった。そして、元就の孫にあたる輝元という人が家臣に対してこれを持ち出したのが伝説の始まりらしい。どうやら、この伝説の“仕掛け人”は輝元のようなのだ。

この仮説を裏付けるべく輝元の当時の状況を調べてみたところ、輝元がこの話をしたのは関ヶ原の戦いの直後であることがわかった。この天下分け目の合戦で敗北した毛利家は分裂の危機に陥った。その危機にあたって、輝元は祖父の話を持ち出したのだ。元就の出した教訓状をかつぎあげ、



毛利家というのは兄弟皆が一致団結して守っていく家なのだというイメージを作り上げる。それによって毛利家がバラバラになるのを防ごうとしたのだ。

しかも、輝元はこの話をする際に不都合な部分を隠している。元就が出した教訓状の中で、彼の威信に関わる部分など、都合の悪い文については触れていないのだ。ここから、よいイメージを作ろうという輝元の意図が見て取れる。やはりこの伝説は輝元によって作り出されたものだったのである。

こうして伝説の“仕掛け人”の存在が明らかになった。ところで、この伝説が作られたもととして元就の教訓状があることがわかったが、ではそれが出されたときの実際の状況はどうだったのだろうか。そこで今度は元就の当時の状況を詳しく調べてみた。すると、現在考えられているイメージとは少々違うことがわかってきた。現在では、

この伝説における光景は、親が子供たちのために思って教訓を与えるという和やかなものと思われている。だが実際は、長男を中心に協力せよという元就の教訓に対して、子供の方、特に弟たちは不満をもち、決して従順に返事をしたわけではなかった。伝説は必ずしも現在語り伝えられている通りのものではないことがわかる。

もうひとつ、別の例を紹介しよう。徳川家康という人は非常に忍耐強く、質素な暮らしをしていたというイメージで江戸時代から語りつがれている。だが、そのイメージはあまりにもよくできすぎていて不自然だ。本当にそうだったのだろうか。先生は、これもまた作られたイメージなのではないかと考えた。調べてみると予想通り、そのイメージ作りには江戸幕府の思惑がからんでいる。幕府は厳しい身分統制をしき、再三にわたる儉約令によって庶民の生活を統制した。そのとき、家康の質素なイメージを作り出すのは幕府にとって都合がよい。江戸幕府の基礎を築いた家康でさえこのような質素な暮らしをしていたのだ、というイメージを作り上げ、だから庶民も質素にするべきなのだということを納得させようとしたのだ。

これらの例をみてもわかるように、操作された伝説、作られたイメージの裏には政治的意図が含まれていることが多い。家を守るため、国を治めるために、イメージを作り上げたり伝説を操作したりと昔の人なりに努力していたのがわかる。先生は、そういった昔の人の統治に特に興味をもっている。



毛利 輝元



徳川 家康

昔の統治の方法やその考え方は、今とは全く異なるものである。一般には、昔の社会というものは現在に比べて遅れたものであり、そこから少しずつ進歩して現在に至っているのだと思われている。だが、そうではないと先生はいう。科学技術に関していえば、確かに徐々に進歩している。しかし社会のしくみに関しては、昔は遅れていたと一概にいうことはできないのではないかと。昔は昔で、今とは全く違う独自の世界を形成していた。先生はそうのように考えている。そして、そういった今とは違う世界に時をさかのぼって触れてみたいという好奇心、それが歴史を研究することのおもしろさに通じているという。



毛利 元就



わかりやすくおもしろい歴史学を

当然のことながら、理工系の大学である東工大においては、どの学生にとっても歴史学というのは専門外のことである。そのような中で講義をするにあたって、何か意識したり工夫したりすることはあるのだろうか。先生にうかがったところ、あまりそのようなことはないといわれた。先生は他の大学でも史学科の学生に対しての講義を受け持っているのだが、そこでも東工大における講義と同じ話をしている。理系だから特に易しくしよう、専門だから難しくしようとは考えていない。こういった先生のやり方は、次のような考えに基づいているのだという。

歴史学というものは非常に伝統のある、古い学問である。そのため現在では専門の細分化が進み、研究者はその固定化された専門に閉じこもってしまう傾向にある。例えば一人の戦国大名を研究対象に選んだら、その一人の研究だけを一生続けることになってしまうのだ。先生は、それではつまらない、もっと広く、全体の動きを見ることができるようになりたいと考えている。そしてそのためにも、歴史学というものをもう少しやわらかいものにしたいという。専門家にしかわからないような学術用語や難しい概念は使わずに、もっと普段の自分の感覚に近い言葉で考えたり書いたりしたい。専門外の人にもある程度わかってもらえるようなものにしていきたいと。

理系の学生に対して講義をすることは、こういっ

た先生自身の考えの実践といえる。理系の学生に教えるために、特に易しくしたり工夫したりするというのではないのだ。

これは専門外の学生に対することだけに限らない。歴史を専門として学んでいる学生にも、山室先生の講義はわかりやすくおもしろいと評判なのだそうだ。歴史が好きで史学科に進んだ学生でも、専門科目として難しい概念などを学ぶようになると歴史が嫌いになってしまうことがあるという。そのような中で山室先生の講義を聴き、歴史のおもしろさが思い出せた、という反応が返ってくる。これは、先生の考えが受け入れられていることの表れともいえるだろう。



取材を通じて強く感じたことは、先生は歴史を研究するにあたって“おもしろさ”を重視しているということである。本文中でも述べた通り、歴史を研究することの根本的なおもしろさは現在とは違う世界に触れられることだという。もっと具体的なことでは、これを調べたらおもしろそうだと思うことを研究テーマに選んだり、実際に調べていって通説を覆すことにおもしろさを感じたりしている。さらに、写真を載せたような実際の文書を解読することもおもしろいという。本当に研究することそのものがおもしろいのだということ

を改めて感じた。これは理工系の研究にも共通していえることではないだろうか。

実際、取材でのお話自体もとてもおもしろいものでした。お忙しい中快く御協力頂きありがとうございました。

(高橋 瑞稀)